

久居の偉人～

うえ の ひで さぶ ろう

上野英三郎博士没後100年記念講演会

日時 令和7年5月10日(土) 開場 13:00～ 開会 13:30～15:30

会場 久居アルスプラザ
ときの風ホール (津市久居東鷹跡町246番地)

～上野英三郎博士～ 日本農業土木の父

明治4(1871)年、一志郡本村甲(現在の津市久居元町)生まれ。東京帝国大学農科大学農科学科卒業。

明治時代後期、近代農業への転換を目指していた我が国の農業土木の研究の先駆者となり、当時なかった耕地整理理論を提唱し、現在の圃場整備の基礎を確立した。

明治44(1911)年、東京帝国大学に日本初の農業工学講座が創設された際、初代の講座主任となったほか、農商務省兼任技師として、全国各地での技術指導に携わり、3,000人ともいわれる技術者を育成し、その技術は、後の関東大震災の首都復興事業でも応用された。

大正14(1925)年没 54歳

●基調講演 14:00～14:40

「上野英三郎博士の偉業」 講師：筑波大学生命環境系 教授 石井 敦氏



【講師の略歴】

東京大学農学部農業工学科(農業土木専修)卒。三重大学生物資源学部助手、准教授を経て、現在、筑波大学生命環境系教授(水利環境工学分野)。専門は、水田の圃場整備、農地利用計画、灌漑計画、開発途上国の灌漑組織等。

論文として「東海地域の耕地整理と圃場整備」「国際化に対応した低コスト大規模稲作経営実現のための圃場整備」「棚田保全に必要な水利施設とその管理の実態」「土地改良区の維持管理費の財源構造」等。農業農村工学会理事、農村計画研究部会長他を歴任。現、農林水産省土地改良事業設計指針「ほ場整備」制定検討委員会委員長、自動走行農機等に対応した農地整備に係る技術検討会委員長等の政府関連委員を務める。

●基調講演 14:40～15:20

「台湾で活躍した、愛弟子 鳥居 信平」 講師：ノンフィクション作家 平野 久美子氏



【講師の略歴】

ノンフィクション作家 日本文藝家協会会員

東京都出身 学習院大学仏文科卒

出版社勤務を経て執筆活動に入る。著書に『淡淡有情—日本人より日本人の物語』(小学館・第六回小学館ノンフィクション大賞)、『トオサンの桜—台湾日本語世代最後の遺言』(産経新聞出版)、『中国茶 風雅の裏側』(文春新書)、『台湾に水の奇跡を呼んだ男鳥居信平』(産経新聞出版・日本農村土木学会著作賞)、『テレサ・テンが見た夢 華人歌星伝説』(ちくま文庫)、『牡丹社事件 マブイの行方』(集広舎)、『台湾クラフトへの旅』(小学館)など多数。

「台湾世界遺産登録応援会」会長、「宮古島市国際交流会」顧問を務める。

撮影 / 藤田修平

主催：久居ロータリークラブ
後援：三重県・三重県教育委員会 / 津市・津市教育委員会 / 三重大学
オープニング協力：三重県立久居高等学校 ダンス部

入場無料 先着500人まで

連絡先：久居ロータリークラブ TEL(059)255-1234

上野英三郎先生没後 100 年を迎えて思う

《農村の知恵・自然・土木工学・諸科学を融合して「農業土木学」を創出》



今年の上野英三郎先生（1872. 1. 19～1925. 5. 21）没後 100 周年を迎える。また上野先生の飼い犬であった、いわゆる「忠犬ハチ公（1923. 11～1935. 3. 8）」の没後 90 年でもある。私たちはここに先生の遺徳を思い、改めてその意義を考える機会としたい。

秋田犬のハチは上野先生が急逝された後も毎日渋谷駅に先生の帰宅を待って出迎えたということで、忠孝を大事にする時代的な背景もあって、朝日新聞が忠犬として取り上げ、映画化もされたことから有名になり、渋谷区ではハチ公の銅像を駅前に設置し、多くの人に愛されることとなった。渋谷区民の皆さんはこれを郷土の誇りとして毎年命日の 1 カ月遅れの 4 月 8 日に慰霊祭を執り行っている。生前のハチ公を筆者の母は見かけたことがあるそうである。現代の感覚で考えるとリードも付けない大型犬があの大勢の人が行きかう駅の改札口に毎日現れること自体驚きであるが、当時はそれを許すだけののどかな地域だったのであろう。

一方、ハチ公が駅に出迎えていた飼い主の東京帝国大学教授上野英三郎先生（津市久居元町出身）はどんな方であったのだろうか。人々に先生の偉業はあまり知られていない。地元の人でもどれだけ理解しているだろうか。残念ながら我三重県人はその偉大さに気づいていないようである。

先生は人類が生存していくために不可欠な衣食住の基盤、すなわち農村のインフラを工学的視点だけでなく、歴史的に育まれた地域の風土や人の営み、農村の知恵、土地土地の自然環境を十分に理解しつつこれを融合させ、開発整備を担う専門技術「農業土木学」を創出された方である。そしてそれを広めるべく多くの人材育成にご尽力された。このことで三重高等農林専門学校（現国立三重大学生物資源学部）に、農業土木学を専門とする我が国第一号の「農業土木学科」を設置する契機となった。

以来今日に至るまで、全国から人材が集まり、その卒業生はおよそ 3 千人を超え、多くは農業基盤や国土基盤政策に関わる行政分野あるいは建設業界、その他の中核的立場で活躍をしてきた。現在でもその人材は引く手あまたである。海外でもその活躍の場は広い。

農業土木学は世界にその類を見ないユニークな学問である。世界ではいわゆる土木工学はあるが農業土木学はない。我が国は古くから稲作文化が発達し、「年貢米」の言葉でも分かるようにコメは一種の貨幣でもあった。米を作るには自然環境の下で、水、土地、そし

て労力が不可欠である。農村・農民は様々な知恵を巡らし工夫をして、水を引き、これを制御し、土地を耕し、米を作ってきた。しかし、その多くは自然条件に制約され限界もあった。旱魃や水争い、洪水など災害にも見舞われることが少なくなかったのである。明治期に入り西洋から土木工学の技術が入ってきたが、基幹的な水利施設はともかく、直接の農業・農地に関わる部分になると、必ずしも古くから培われた農村の知恵や自然条件との整合が十分ではないことに上野は気付いたのである。そこで上野は当時耕地整理事業を所管していた内務省（現国土交通省）からその所管を農商務省（現農林水産省）に移し、農業土木学として人材育成を始めたのである。

人が生きていくためには、衣・食・住の存在が大前提である。文明が高度に発達した今日ではこれに加えて、情報そして衣食住を得るための収入が挙げられるであろうか。この中でも食料の充足が大前提となる。古くから職を求めて、また食を得るための土地・水を求めて人々は戦いをしてきた。

先に津市でも上映機会があったが、医師である中村 哲先生がアフガニスタンの土地で、かの地の争乱と困窮を改善するには、医療支援はもとよりであるが、むしろ食糧の自給が不可欠と察し、日本の農業土木技術を学び直し、住民と力を出し合って用水路の建設、農地の開発を行った。そのドキュメント映画が上映され観客に大きな感動を与えた。

農業土木は、土地の風土、人々の知恵と力を活かしながら、平和をもたらす重要な技術なのである。今も国際協力事業団などを通じて世界各地に多くの農業土木技術者が派遣され、技術協力や技術指導をしている。

農業土木技術者が最も多く関わる分野は（農業・農村）の土地改良事業である。ここで言う土地とは必ずしも地面だけを指すのではなく、農業・農村の基盤（インフラ）を指す。

大きくはダムや堰を建設して水路を引くかんがい施設の建設や管理、洪水の排除や農地の水はけを良くするための排水施設の整備管理、効率的な農業生産を展開するための農地の区画形質の整備、農作業や農産物の流通そして農村に住む人々の日常に使う農村道路網の整備、農村生活の向上と地域水質改善を図るための集落排水施設（農村下水道）の整備、その他防災を含む農業農村に関わる多くの基盤整備がある。加えて、これらの施設を管理運用するための組織作り（土地改良区など）も担っている。

近年の文明の発達、経済活動の高度化、そして ICT 技術の発達は、情報通信や自然観察、施設制御などのための各種センサーや電気通信制御技術、ドローンの駆使、農村における自然環境のコントロール、景観の維持なども重要な課題としてその範疇に入る。増々領域は広がっているのである。勿論その根底には、穏やかな人間社会の形成、相互理解と思いやり、人間生活の営みを考えることにある。そのために、三重大学では手段としての土木工学の知識はもとよりであるが、農村社会や自然環境その他多方面にわたる知識を得るために多種多様な科目が選択科目として用意されている。

上野が創設した農業土木学は、100 年の時を経過して、初期のかんがい排水技術、耕地整理技術を超えて、社会の基礎的基盤作りの要を担うものに発展してきているのである。その声は国内ばかりでなく世界に向けて発信していかなければならない。